慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「生きる自信」：希死念慮者との半年間の関わりから
Sub Title	The confidence to live : a case of a suicide-minded woman student
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1993
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.38 (1993.) ,p.11- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000038-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Ann, Rept. Kyoritsu
Coll. Phrm.

「生きる自信」

——希死念慮者との半年間の関わりから——

小川芳子

The Confidence to live

——A case of a suicide-minded woman student——

Yoshiko OGAWA

I wish to report my concern about a student who has been melancholiac for half a year.

She attempted suicide twice this term, because she wanted to gain the attention of the counselor.

Usually, the friendships with her friends allowed her the opportunity to escape depression. Although occasionaly these friendships did result in deeper depression, meeting with friends who accept her was usually a cue to escape melancholy.

Care should be taken to use a check list, so that the counselors preconception won't affect the results. I have experienced this with the Thematic Apperception Test (TAT). Since it doesn't involve the counselor's evaluation, the Baum Test allows clients to easily express themselves and is prepared.

1. はじめに：

平成X年本学の4年生であったY.Hさんは夏休みに入るころから部屋にこもりがちとなっていた。夏休みとは言え4年生は，卒論実習をこなすために，また卒業のための試験に備えての勉強があり休んでいるわけにはいけないのが，本学の多くの4年生である。部屋の中で何もしないでぼーっとしているYさんを見て普通ではないと感じた母親は，卒論担当の教授に相談，学生相談室のカウンセラーとして卒業までの半年，かなり密接な関係を作り卒業までこぎつけることができたのだが，卒業半年後の12月20日Yさんは自らの命を断ってしまった。卒業してしまってからは，全く関係を断ってしまったわけではないが，学生時代ほど近い関係には，保てなかったのは事実であり卒業させてしまったことがYさんの人生を無駄にしてしまったことになったのだろうか，という述懐を含め学生だったYさんとの半年間をここに再現し，関わりの不適切さ，診断の見込み違いがなかったかなどを改めて考察する。

2. Y.Hさんとの関わり

1) 来室動機：

卒論担当教授からの勧め。

2) 主訴：

勉強が手に付かない。私は生きている価値がない。

3) 初回面接：

① 平成X年8月23日。母親と卒論担当教授室で一緒に逢う。Yさんはふっくらした可愛らしい感じだが，終始うつむいて何も話をしない，母親が日常生活について次々と語る。家で何もしないじーっとしているので，気になって自宅近くの精神科に連れて行った。薬をもらったので数回飲んだがこんなもの効かないと飲むのを止めてしまった。

母親に待ってもらうことにして相談室で2人きりで話をする。黙っていることが多く非常に時間がかかるが，ポツリポツリと泣きながら話をしだす。話をしようと思うのだが，話が出来ない。何を言ったら良いのかわからない。ごめんなさい，スミマセンを繰り返す。自分の考えをまとめられないという風にも見えるが，話す内容には，異常矛盾などは感じられない。何もわからない，母親は何でもしてくれる，私は何もしなくても良い。何もわかってないので何もすることはできない。

「お母さんにやってもらえること，自分でやらなければいけないこと，本当に何も出来ない方とは思えないけれどどこまで出来ないか一緒に整理してみましょう」，と次回の時間を約束しようとしたが，卒論生仲間との旅行の約束，9月1日は4年生の卒業のための特別試験があるのでそれを受けられたらその後で連絡をすると言う。時間がかかったが，これだけはっきり主張出来るので青年期の大人になる過程での混乱と思い連絡を待つことにする。

4) 家族と生育歴：

父 51歳，一流企業に勤めるサラリーマン。
おとなしい，朝6時半に出て夜10時過ぎに帰る規則正しい生活者。

母 46歳，専業主婦，パート，カルチャーセンターなどを覗いてみたが長続きしない。
地方出身兄弟多い長女，自分から遊びに行くこともない。
Yさんは大声で話すのが恥ずかしい，中学校ぐらいから嫌いになった，殆ど話をしないと言う。

Yさん 22歳，1人っ子
親から特に手のかかった話など聞いていない。幼稚園，小学校，中学校，大学と4回の引越。大学にYさんが入ったことで1時間位で通えるところに転居，ただしここは駅から遠く毎日母親が駅まで車で送り迎えをしている。卒業前の慌しい頃バス停の前という同じ町内に転居，いずれも東京市部住宅地内のこと。近くに子供がいなく，大人の中で育った感じ。母親は祖母から，1人っ子の方が目が届いていいよと言われそれを受けて次の子供を産まなかった。小学校の頃は，勉強の出来る態度の良い優しい子と言われた。3年生の時通知表にもっと沢山の人と話が出来るようになるといいですね，と書かれた。黙って座っているような子，自分でも何でも出来ると思ってしまっていた。何も出来やしないのに頭でだけ出来ると思ってしまっていたと語っている。

5) 入学動機：

高校の時，理系の科目の方が好きだったし出来た，理系の中で薬学がらくそうに見えた。推薦入試早く決まればいいと思って受けたら入った。

6) 面接経過：

② X年9月9日（土）
卒論生同志小旅行に行ったが，みんなに迷惑をかけただけでちっとも楽しくしてあげら

れなかった。物忘れが激しく人に何かを伝えられない。他の人に気づかいばかりしていると泣き出し，カウンセラー（以降Tと記す）にも気を使い，すみませんとか悪いと言う言葉が良く出てくる。言われたことは出来るが，自分で決定することが出来ない。卒論という新しい環境の中で自分の取るべき態度がわからない。

話はとつとつとして何を伝えようとしているかわからない面もあるが，こちらからの問い掛け無意識の言葉は割合きちんと出来る。整ったものを求めるあまりに苦しくなって黙ってしまったり泣き出してしまう。自分の行動に自信を無くしてしまった結果ではないかと考える。

卒論の先生は自由にして良いと言われたとのこと，卒論に行けたら行く，行けなかったら相談室にくる。行けた場合には1週間後と約束をする。

③ X年9月16日（土）（約束日）

母親と一緒にくる。親として見ていられないので精神科へ連れて行きたいから紹介して欲しい。前のH病院は，と聞くと行ってもしょうがないと本人（C）がいうので約束してあった時間キャンセルしてしまったので，今更行けない。J大学病院の医師に紹介状を書く。

母親は心配しているが，本人は何かと卒論に通えていることであまり話をしないで帰る。

④ 9月20日（水）

J病院の外来でもH病院と同じ薬を処方される。病院からの診断書がT宛てに郵送される。「Depressionの疑い」であった。

⑤ 10月3日（火）（約束日）

卒論実習何とかやっている。わからない時は，聞けばいいんですよね。と自分の行動に少し自信が出てきた感じを受ける。薬もらったが飲んでないというので飲むようにすすめる。

⑥ 10月16日（月）（約束日）

先週は卒論に行けなかった。親戚の家に泊まり掛けで行ってきた（10月5日～7日）。愛知県で1人暮らしをしているのんびりしたおばさんで，親があんな風にのんびり生きるようにするといいといって行かせた。行っても何も出来ない迷惑かけるから帰ってきた。私は何も出来ないを繰り返す。何も出来ないのは病気と考えられない？　と聞くとそれは絶対認めない，病気ではないから薬も飲んでないという。

黙ってしまうのでTAT（統覚心理検査）を出してこれについてお話してみようかと誘う。カード1（**図1**）を見せると2分位じっと見ているが手には取らないで小さい声でつぶやく。

C：男の子が肘をついている，位しかわからない
T：（男の子，そう，いくつぐらいに見える）
C：いくつかわからない
T：（肘をついて何か見えている？）
C：何かを見ている，でも何だかわからない

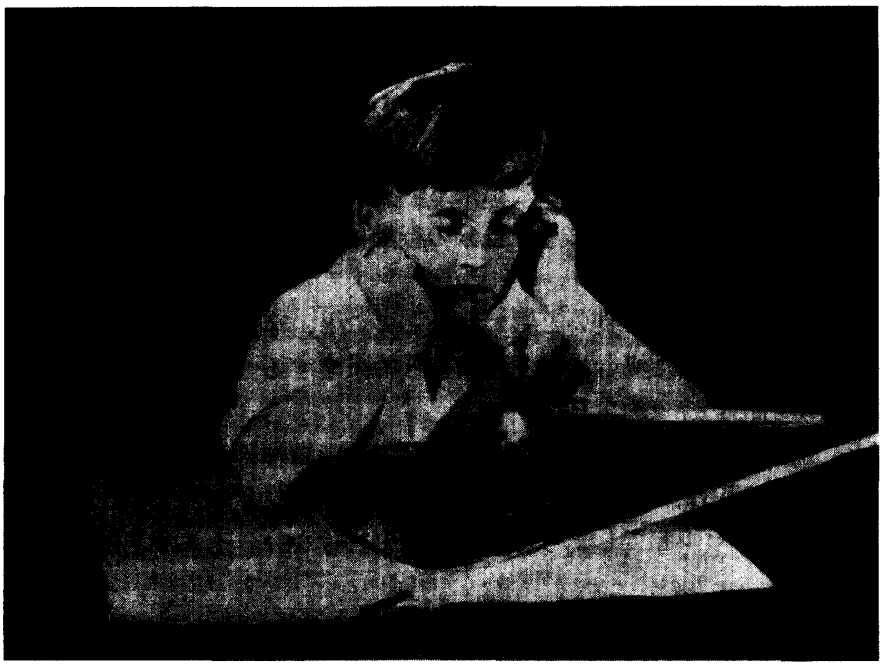

図 1　TAT カード 1

T：（やりたくないのかな～今日はやめようか）
C：やりたくないんじゃなくて，本当にわからないんです。
T：（ごめんなさい，わからなかったのね）
　（これはヴァイオリンに見えない？）
C：（泣き出してしまう）そういわれるとヴァイオリンに見えます。でもいわれないとわからない，上の線だけ見えて下の線は別の広がりに見えてしまった。とまた泣き出してしまう。
T：（そうか矢張り今日は無理だったわねまたにしましょうね）

卒論に行けないから1日置きにここでお話の時間にしましょう，と次は19日約束して帰す。

10月19日約束日電話もなく来ない。家にTELすると学校に行ったとのこと，夜奥多摩に行っていたことがわかる。

⑦　10月20日（金）

何も出来ない，自分は生きていてもしょうがない，死のうと思った。青梅駅で降りてレターセットを買ってぶらぶら歩きだした。橋の上で飛び込もうかとぼーっとしていたら，車で通りがかった親と同じ年代の夫婦に声をかけられた。その人達の家に連れて行かれおにぎりをご馳走になった。おばあさんと3人兄弟のうち1人が家にいた。

T：（見つけられてどんな気持ちがした？）

C：その時は嬉しかった。でも今日は嬉しくない，生きていたくなかった。生きていても何も出来ない。

部屋の中に閉じ込められた感じがする，窓も出口もない，狭い部屋の中にいるようで息苦しくなるという。

苦しくてつらいのねと受けながら，余り苦しいと思うときには，病院に行くことも一つの解決方法であること，薬飲むと少し楽になれると思うと伝える。

次回は病院によってからくるとのこと。

⑧ 10月23日（月）

病院に行きたくないと言っていると母親から電話，どうしてもいやなら無理に行かずに学校にだけ来るよう伝える。

暫くして，すみませんと入って来る「話が出来ない」と言うことを考えてみようと話題にする。

相手の目を見て話しなさいと言われて育ってきた。そうすると相手は態度が良いと思われるらしいが，自分は何もわかってはいない，理解出来てないのに「はい」とか「わかりません」と言っていた。

友達とは，同じことしているから話題見つかったし，楽しくやってこれたが，ちょっと先輩だったり，他校の人だったりすると中学の頃から話せなかったのを思いだします。高校の時も，ハンバーガーショップでバイトしてみたが，仲間同志の話が出来ずすぐ辞めてしまった。字ずらでわかっても理解していない，わからない人間は生きている価値がない，狭い部屋に押し込められている感じが強い。

⑨ 10月25日（水）

今日の話題は「今自分に出来ることは何だろう」

T：（寝ること，食べることこれは自分でできるはね？）

C：出来る，でも自分から何か出来なければ生きている価値がない。

今まで授業だけなら出来てきた，卒論が入ったからいけない。言われたことを覚えるだけ，マークシートぬる試験だけなら何とかなるだろうけれど，このまま学校続けてもやめろと言われるだけだろう。

卒業後の事について，なかなか考えられなかったが，病院実習に行って調剤なら自分でも出来るかなと思えたので，調剤薬局を就職先に決めていた。だが，この7月にバイトを兼ねて来て下さいと言われ行った。そこで他校の薬大生も来ていて，テキパキお客の相手するのを見ていたら自分はダメだと思ってしまい1週間でやめた。

⑩ 10月27日（金）

家で遊んで暮らしている。母親とボーリングに行ったり食事の支度をして過ごす。高校でも，大学でも卒業だけしてもそれだけでは実力ない。自分が考える目標に達していない。家の中で遊んでいても面白くない，どうせ面白くないのなら勉強してみるのもいいかなと思う。友達から電話あり何をしているの？　と聞かれたら，相談室に通って好きなことしゃべっていると話しておいたという。

10月から土曜は授業があり金曜日まで卒論に当てられていたが，これまでの土曜日は出席していない。

⑪ 10月31日（火）

先週の土曜日授業に出席したこと。夜友達の誕生パーティがあり行ったみたが，やはり話が出来なかった。友達達は夫々自分の意見を言えるのに自分はいえない。友達の1人の家庭が困った状況になっていて，そこの弟をどうすべきかで話が盛り上がった。

T：（その話聞いて何とも感じなかった？）

C：すごく大変だなと思った。弟さんが勉強できなくて困っているということだったが，その友達も大変だろうなと思ってしまった。

T：（いいこと感じたではないの，そう感じたこと言ってみた？）

C：いいえ，だって他の人は弟のことでいろいろ家を出て外で勉強させたほうが良いとか，いろいろ言ってあげたけれど，私はどうしたらいいかなんてわからない。私は何もわからない。

T：（友達が大変だなと感じたらそれをそのまま言ってあげられたら，よかったわね）

C：そうですか？　と半信半疑な返事が返って来た。

自分は何もわからないから，郵便局に払い込みに行っても何か聞かれたらどうしようと心配。買い物に行っても何か聞かれたらどうしようと落ち着かない。心配で仕様がない時は薬が効くかもしれないと伝えると，先週母親が病院に行き薬もらって来たが飲んでないとのこと。（病院では抗うつ剤が処方されている）

少し自分で勉強しようかなと行う気分もありそうなので1週間後の約束とする。卒論も本来外研といい学外の研究施設に通学する形を取っていたが，このままでは外研先に迷惑をかけるからと学内の担当教室に通学するよう配置転換が行われた。

11月6日（月）母親からまだ寝ているとの電話。（約束日）

その後本人から電話。気分転換に明日展覧会でも見に行こうか？　と誘う。

⑫ 11月7日（火）渋谷駅で待ち合わせしてシャガールの展覧会を見る。喫茶店で少し話をし，明日は卒論に行くというので，終わったらよってとその日は別れる。

⑬ 11月8日（水）新宿まで出て来たが行かれない，卒論に行かなくても良いから相談室に来るよう指示。

このままTと話をしていてもよし，実験室で人のしていることを見てそれを書いておくだけでも良いから行ってみるのもよし，Cの好きなようにしなさいというと行ってみるというので送り出す。

⑭ 11月10日（金）来られないとの電話を無理に引っ張りだす。一緒に食事しながら話しをする。実験しようと思うと手がふるえる。手の使い方まで先生に教われば出来るが，言われないと何も出来ない。他の人はどんどん自分でやっている。私は他の人が見ているような気がして集中して何かをすることができない。それが病気ということちがうの？　と聞くと，こういうふうに育ってしまっただから治らないと言う。気持ちの持ち方など変えても変わるわけない。結局学校には来られなくなるだろうという。午後になってしまったがどうすると聞くと実験室に行く。13日午前約束。

11月11日（土）は授業日で1時限のみ授業に出席帰宅。

⑮ 11月13日（月）（約束日）

自分には熱中できること，夢中になれること，好きなことがない。小学校以前から自分は何でも出来る人間と思ってしまった。だから自分から一生懸命しなくても何でも出来るはず。でもそれは嘘だった今更戻れないし，覚えられないし，話せない。

この場では，3歳児にもどってもいいのよ，と伝える。

実験室にも行けないというので15日を約束して帰す。

⑯ 11月15日（水）（約束日）

母親は嫌いだ，先回りして何でも話されて，勝手な解釈をして話を進めてしまう。口をはさむ間もない。やろうとしているのにその前に何をしろと言われる。

「やる気無くすでしょ」というと「言わなければぜんぜんやらない，いつになってもやるわけない」といわれる。

T：（そういわれてあなたはその後どうするの）

C：どうしてもやらなければ行けないことだけ，時間が経ってからやる

T：（いわれなくても，いわれてもやらなければならないことはやる）

C：そう。親戚の人や他の人に自分のこと先にどんどん話されて，自分が聞かれているのに答える前に答えられて「ねえそうでしょ」と念をおされる。

T：（自分で答えなくても良いわけだ。ではちょっと話変えて，もしお母さんいなくなったら，あなたはどうする？　お父さんがいられればお金には困らない）

C：食事の支度するために買い物に行く

T：（食べることの準備できるということね）

C：はい

T：（これは嬉しいこと聞いたは，生きて行く気持ちがあることね，自分で食べるために準備することですもの）

次の日も実験室には行けない。

⑰ 11月17日（金）（約束日）

物事の決断について：誰かが情報を提供してくれる，そのことを参考にして最終的な決定をするのは，自分であることを納得する。例えば，洋服いつも素敵なものを着ているので褒める。誰が撰んだのというと，母親と一緒に行って決める。いやだなと思っても買うのをまかせているの？　と聞くと「いやという」それが自分で決めるということと違うかを自覚させる。

夜は編み物をしているという。

（10月20日以来母親が大学に来るときもずっと付き添っていたが，少し落ち着いて着た感じがするので，用がある時また少しは気晴らしも良いと思うから，無理に付き合わなくてよいが，出かける時はどこに行くか親の側から伝えるよう指示）

⑱ 11月20日（月）（約束日）

母親とドライブしたり，毎日の生活は難なく過ぎている様子。このまま毎日送っていって将来どうなるのだろう。将来のことを考えることが出来ない。理解しなければ行けないことも理解できない。こんなこと普通ではないから，どう言うことかわからないと思うけ

れど。…

T：（あなたは普通の人ではない。特別の人なのね。それに対して，私は普通の人間だからわからない。理解してもらえないという感じがするわけね。）

C：そう，毎回同じような話で終わるから

T：（ここへ来る意味を感じない，でも来ている）

C：だって，行くとこないもん。

T：（それも1つの選択ね，実験室の方が良いと思ったらそちらへ行くのはいいけれど，私も明後日待っているわね。）と終わりにする。

Tに対する不満をはっきり口に出すことが出来た。これまでのすみません，申し訳ないという気遣いから少し開放されて来たと思われる。

⑲ 11月22日（水）（約束日）

自分で編み上げたというセーターを着て表情にも少し明るさを感じる。

話をしている間に，またこのままで良いのかなと言う焦り淋しさが出て来て一泣きする。

C：小さい時，親戚の家に行って大人の話聞いてもちっともわからないでぽつんとつまらなくしていた。その状態がずっと続いている感じ。

T：（そのまま続いたら困る）

C：間に合わない。取り返しつかない。

T：（何か間に合わないことあるの？）

C：（沈黙）

T：（じゃ，それは宿題ね）

⑳ 11月24日（金）（約束日）

T：（一昨日の宿題の答えは何だった？）

C：全部，抜け道がない。小学校時代から間違っていた。

T：（何が）

C：勉強だけは出来ていたかもしれないが，小学校時代から，作文は苦手だった。その辺に間違いがある。大学に入って，小学校5年生の家庭教師を頼まれたが，勉強がわからなかった。こう育って来て，出来なくなっちゃった。気がついたらこうなっていた。編みものが出来たこと素晴らしいことではない？　などの会話を続ける。先生にわかってもらっても何にもならないし，自分ではどうにもならない，と寂しげに笑う。

㉑ 11月27日（月）（約束日）

約束の時間に電話あり，行かれない。（土曜の授業休んだ，学校にいかれない）大学前のレストランでの昼食に誘うと，あまり食べられないけれどといいながら出て来ることには同意。Tは昼食Cはケーキを食べながら成人式の思い出話。相談室に来ることつらいというと頭をふるので次は大学で待つこと伝える。

㉒ 11月29日（水）（約束日）

病気の本見ると病気かなとも思うが，普通に成長できなかっただけで病気ではないからどうしようもない。出来ることは，YES，NOの返事と挨拶ぐらい。生きて行くには充分といっても通じるCではない。わからないことあり過ぎて，何がわからないのかわからなくなってしまった。

（このあたりになると1日置きの付き合いに，Tの方が疲れが出て来た感じで一緒に落ち込んで行くような危機感を感じる）

㉓ 12月1日（金）（約束日）

母親から電話

首筋に赤い腫れ，泣いてばかりいて顔も腫れてしまい出かけられる状態ではない。

本人と電話で話す

食事もしないと母親から聞いていたので，泣いてばかりで良い運動になったかも，おなか空いたでしょう？　とわざととぼける「すかない」というので食事できないのなら病気だねというと，「病気ではありません」とまた強く否定。翌日授業に来るというので，来たら顔を見せて，でも無理しないように早まったことだけは，絶対しないよう伝えて電話切る。

㉔ 12月2日（土）

授業には出なかったが，夕方父親が車を運転して母親共々連れて来る。良く来てくれたと喜んで，相談室でしばらく話。父親は，「いつもお世話をかけてすみません」と挨拶はされるが，端正な顔は無表情で取り付くしまのない感じの方である。

自分はひどい人間だから，こうなってしまった。22年間全部失敗だった。こんな風になってしまったからには，終わらざるをえない，もう終わっている。こんな調子ではまたという危険があるので，母親にくれぐれも目を離さないように依頼して帰す。

㉕ 12月4日（月）

母親の付き添いを再開。時間遅れるとの連絡，学校で誰かに逢うのはいやというので，少し離れた場所にある同窓会の部屋を借りる。

C：どうしみんな普通の生活できるのかがわからない。

T：（どんなところからそう考えるの）

C：上手く説明できない

T：（上手く？）

C：上手くではない，何も出来なくなっちゃった。

上手くいえなきゃ，面白くいわなければと思っていた。

少し洞察できたかなと思っても見たが，また明後日待っているからね，というと待ってもらっても困る，もうだめ，生きていてもしょうがないからと答える。

この日なかなか話が始まらなかったので，BAUMテストで木を一本描いて欲しいというと画用紙中心ではあるが小さく**図2**を描く。そのとげとげしい木を見てCのつらさと怒りを感じTとしては，黙って見守る以外言葉を失う想いに駆られた。

12月6日（水）

来られない旨電話。電話でYES，NOの話を少し明日を約束。

㉖ 12月7日（木）（約束日）

遅くなると本人から電話。本人自身がかけてくれたことを喜び待つことを伝える。

泣きはらしたのかむくんだような顔をしている，授業の始まっている時間なので，誰にも逢わずに来られてよかった。沈黙の多い面接，出来るようにならない，変われない，方法がないなどぽつりぽつり，死にたいけれど死ねない。出来ると思えること何もない，私

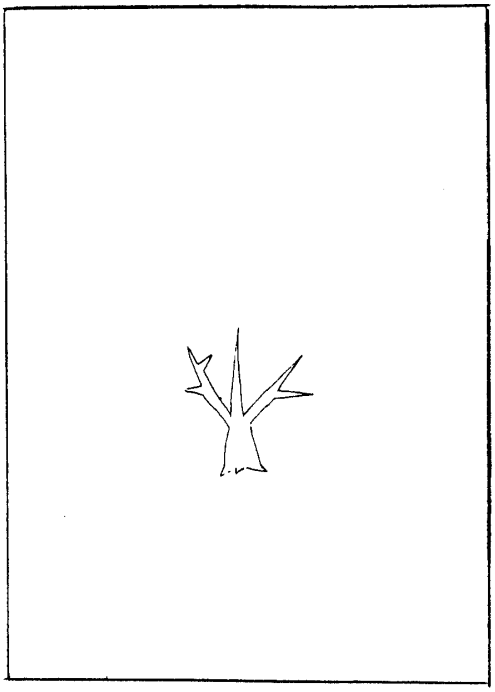

図 2　㉕ BAUM TEST

を見捨てて欲しいというようなことをいう。

㉗　12月12日（火）（約束日）

9日（土）の授業にも出られず，11日の約束1日のばす。

一緒に来た母親だけJ病院に行って来たが，ある日突然治るから，薬はしばらくやめて病気ではないから普通に扱ってなさいと言われたという。

相変らず沈黙の多い面接に，ロールシャッハテストの用紙を出してみるが，反応数が非常に少なくじーっと見ているだけなので途中で中断する。

16日（土）の授業にはなるべく出席するよう母親に連れて来てもらうよう依頼。

4年生の友達にも16日に来たら仲間に入れて面倒見て欲しい旨依頼。

12月16日（土）

3時間の授業の内2時間を受けて帰る。母親は，J病院でCTスキャンの予約をする。

㉘　12月18日（月）（約束日）

授業に出てもしょうがないから土曜日途中で帰った。

友達にも逢いたくない。普通に成長して来なかった。

㉙　12月20日（水）（約束日）

昔の記憶の話，公園で遊んでいて男の子が怪我をした，みんないろいろ世話をしたけれど，私は何をしたらいいかわからずずっと一人でみんなのすること眺めていた。この感じが今まで続いている，何をしてもだめ。

㉚　12月25日（月）

母親のもらって来たJ病院からの診断書を卒論担当教授に届ける。本人も一緒に行こう

と誘うが途中ロビーの椅子に座り込んで行きたくないという。

毎日寝て食べるだけの生活こんなのでは生きていてもしょうがないと相変わらずである。正月明けの1月8日の試験受けられれば卒業可能だといわれた。焦らず，寝て，食べて1月に逢いましょうとしばらく休みとする。

平成X＋1年1月8日（月）

早朝，試験受けられないと電話ある，明日来られたら来るよう伝える。

1月9日（火）

電話で話。みっともなくて出て行かれない。毎日寝て，食べてばっかり太ってしまった。テレビ画面が流れて行くだけ。12日に約束。

㉛ 1月12日（金）

また電話，出かけられない。出て行っても1度に変われるわけない。出ても仕方がない。

そんなに出て来られないのなら私の方からでかけて行こうかな，と16日行く約束。

1月16日（火）

何と大雪注意報が出て電車もちらほら止まり始めたニュースに，電話してTから会いに行くのを中止。

1月17日（水）

試験も受けられなかったし，昨日も予期せぬ事態で逢えず長期戦で行くよりないかという気持ちになる。葉書で水曜の午前中はあなたのために空けておくので気が向いたらいつでも来るように伝える。

1月18日（木）

4年生の友達が，Cに逢いに行こうと思うがどうかと相談に来たので，是非行って欲しいこと。無理に出ていらっしゃいではなくて心配だから顔見に来た。みんなが心配しているということを伝えて来て，とTも本を1冊託す。

㉜ 1月24日（水）（約束日）

すっきりした顔で入って来る。友達が尋ねて来て忘れ物をして行ったので届けに来たという。約束の時間より1時間早く来て寄ったという。

寝て，食べてと行う生活がそれほど苦痛ではなくなって来た。今まで外へ出なければ行けないとばかり思っていた。安らげる場が見つかって良かったわねといった話で，じっくり時間をかけて自分を探して行こうと告げる。

4年生は，1月に入ると卒論は終了し，毎日授業に出席することになっている。

㉝ 1月25日（木）

午後から授業に出ようと思ったが出られない。試験うけた方がよいか？　と電話で尋ねるのでそれは良いと答える。

1月29日（月）

試験日だが来られない。母親1人で来たので面接。

先週は2日学校に来て授業受けたとのこと。日曜日も本引っ張りだして勉強していた様子だが，何も言わないことにしている。家で寝て食べてばかりいたので太ってしまい着る

服がないというので26日には買い物にも行った。

父親とCさん両方で逃げている感じ食事時間も互いに顔合わせないようそっぽ向いている。母親の生き甲斐は娘でしょうか。行き当たりばったりの生き方で子育てしてきたと思う。娘と友達のような関係作りたいとも思っています。娘にお母さんは長続きしないのだからと言われるが当たっているかもしれない，今は，娘と一緒に生き甲斐を探しているのかもしれない。親として成長してないんでしょうね。「一緒に何かをすることが大事」，命令してさせるのではなくて相談して決められると良いですねと励ます。母親に落ち着きが出て来た感じがする。

㉞　2月2日（金）（約束日）

少し遅れたが1人で来られたと喜ぶ。

勉強する気はなくなったとのこと。またかたくなな調子に戻っているのが気になる。友達から電話かかってきて，勉強出来ないと言うとどうしてどうしてと理詰めにされて答えられない。どうしてと言われて答えられるようならこんなに苦労することもないものね。と受容すると泣き出してしまう。折り紙でも折ろうかと2人で夫々指を使いながらゆったり話を進める。近頃は，昼迄寝てしまうので今日は起きるのが大変だった。

2月7日（水）（約束日）

母親から断わりの電話。起きられない。暇だ暇だと言っているのにと文句。

㉟　2月14日（水）（約束日）

本人から電話。出かけたくないというので電話で小1時間話をする。

パッチワークしている，昨日スキーに行った。楽しかった？　楽しくない。このまま家の中にずっといるか，施設にでも入れてもらうしかないでしょうね。投げやりな答えを返して来る。逢えれば私は嬉しいので来週も待っていること伝える。

1月29日の試験問題を送る。

2月15日（木）

母親から電話。問題着いた。本人は14日～16日の予定でスキーに行っている。

2月21日（水）（約束日）

電話で今勉強しているんで行かれないと連絡ある。

㊲　2月27日（火）

1週間勉強した。最後の試験を受験してきたと寄る。やっぱりだめだわと解答を持ってきて自己採点する。51/100点1週間でこれだけ出来たら上々でしょうと褒める。すっかり見違えた感じに明るい。今日は先生に木を描いてあげようと思ったんです，と紙とクレヨンか何かないですかと催促する。(**図3**)

またいつ落ち込むかと思うと怖いけれど，今は勉強するのいやではないしもう1年勉強します。

先週高校時代の友達とスキーに行った。友達は社会に出てもう働いている人だがスキーの荷物作り母親に手伝ってもらっているし，入れ方も下手なの見ていて自分の方が上手だ何か出来そうな感じがしてきた，という。

3月1日（木）

朝7時自宅に電話あり，嬉しくて寝ていられないという。思いきりこれから遊ぶとい

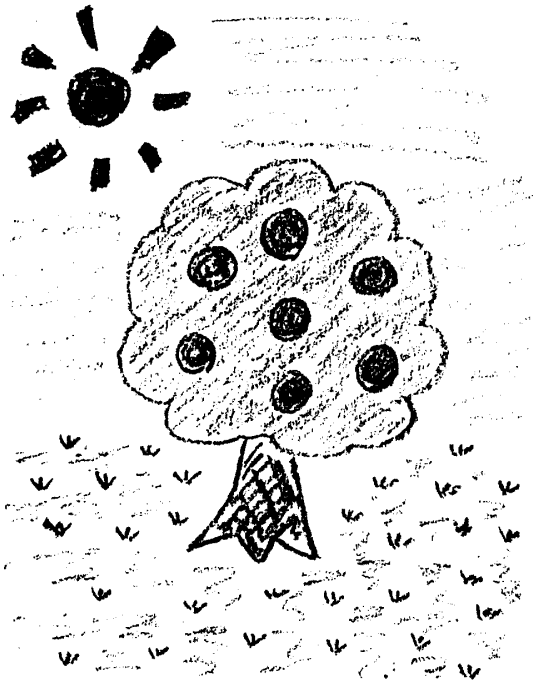

図 3　㊱ BAUM TEST

㊲　3月9日（木）

う。3月3日の卒業判定会議を待ってからにしようとちょっと水を差すが，感じない様子。これまでに自宅まで電話をしてきたことはないので，かえって心配になり昼自宅に電話してみる。母親も爽になってしまったみたいですね，とのこと。

3月3日（土）

卒業判定会議，診断書が提出されていることから，特別の配慮として，卒業論文の提出がなされた時点での卒業を認めることが決定された。

卒業論文は，最初の外研の先生の所へ1週間通い詰め先生にかなり手伝ってもらった様子だが，前に実験してあったところに加えることで何とか形に仕上げることが出来提出。Tにもコピーを1冊置いて行く。それと一緒に卒業式が済んだら廻りの友達たちに配るという挨拶文を置いていく。(**図4**)

Tには絵を描いて置いて行くという挨拶をして自分で終わりを宣言しているので定期的な面接は，この時点で終結にすることを確認する。

3月12日（日）

卒業式，何事もなかったかのように，女子大生最後の日をエンジョイし晴れやかな顔で巣立って行った。

学校の行事も全て終了しました。
卒業式も謝恩会も楽しかったですね。
さあ、これからが最後の頑張り時。
悔いの残らないよう一問でも、一時間でも多く
勉強して自信をつけよう。
皆の進み具合が気になって不安になってしかたないなら、
早起きしてみることをお勧めします。
気持ちがいいですよ。それに、いつでも電話してきていいよ。
共立薬科の卒業生であることに誇りをもって、お世話になった
先生方のためにも、自分自信に打勝つためにも頑張って！
リラックスすることも忘れずに、苦しいけどできないことでは
ないと思うでしょう。
くじけそうになっても、可能性があるうちは絶対にあきらめちゃ
ダメ。私の大逆転のようなことが起こることもあるんだもの。
努力は無駄になることなんかないよ。
国試は今度が最後じゃないんだから、合格するまで挑戦しよう
ぐらいの気持ちでね。体には気をつけて。無理は禁物、ほどほども
大事なこと。
それでは、健闘をお祈りしています。
皆で卒業の次は皆で合格しよう！！

P.S.
本当に、みんなのおかげです。ここまでこれたのも。
本当にありがとうございました。これからも、よろしくね。

図 4　卒業時の挨拶文

3. 考　察

1) Y さんの病理

直接面談をしただけでも 37 回を数えた。これを改めて見直し，気持ちの流れを **図 5** に表現してみた。半年間，自身をなくした Y さんは落ち込んでいたわけだがその中にはちょっとした触れ合いで立ち上がろうとしたり，反対に些細な言葉が，さらなる落ち込みを誘発してしまったこともあった。

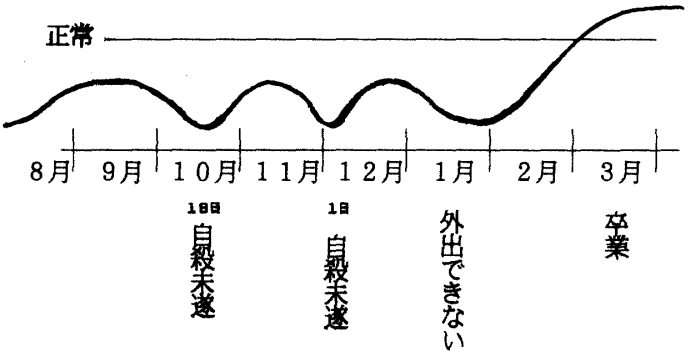

図 5　感情の起伏線

Y さんは最初，親と一緒に H 病院に行き，その後 T の紹介で J 病院に行きどちらの診断書も「うつ状態の疑い」と記されていた。疑いという言葉に私は病気でないに違いないと思い込んだ Y さんは，「私は病気ではありません」を固執し，薬も拒否し続けた。

うつの特徴でもある次の病状が見られた。

- 落ち込みがあったこと，漫然とした不安，淋しさを感じていたようだ
- 自殺したい気持ちを強く持っていたこと
- 人に合いたがらない気持ちが強かったこと
- 自分をだめな人間と思っていたこと
- 口数がすくなくなっていたこと
- 勉強などが手に付かなかったこと
- 時にいらいらしていたこと

これらの症状を出しながら「私は病気ではないから薬なんか飲んでも効かない」と頑固に薬を拒否し続けた姿は，病気が治っては困るのではないかとさえ思わせるものであった。今になって更にはっきりすることは，卒業できることが確定したころからは，燥状態に移行し半年舞い上がった状態に手を付けられず，次の欝がめぐって来た時未遂では済まされず自殺されてしまった。このことは残念でならない。燥状態になった時も落ち着きのなさ，話の饒舌さ反復，浪費など目に余っても親の環境が，それを許すものである時，外部者は口を挟むことが出来なかった。しかも学生ではなくなって卒業生にまで力を注ぐゆとりがないと行ってしまえば言い訳になるかもしれないが，悔やまれるところである。欝病には，薬が効くと言われる現代の医療の中にあっては，疑いなどと言わずにはっきり本人に病名を告げることが，治療につなげる道だったのではな

かろうか。

母親は，現在でも病気ではなかった，友達関係などに我慢できないことがあり死んでしまったと信じて疑っていない。家庭環境が，もう少し我慢を強いられるものであったら病状がまた違っていたのではなかろうか，そう状態の折りにはあやうくカード地獄に陥りそうになったこともあったが，それも病気のなせる技ではなくYさんの人となりがさせたのだと親は考えていた。

初回面接で次の約束をしようとした際，言葉数は確かに少なかったが，自分の行動に対して責任を持つような返事をしている。ステューデント・アパシーの一段階とも思えた点から，山田[1)]の方法で考えてみたい。退却の3因子とは，学業からの退却，人間関係からの退却，時間からの退却と進んで行く。初回面接当時は，学業から退却していたのである。その後，2回の自殺未遂は，人間関係からの退却であり，11月22日⑲に語られている「間に合わない」もう過去は取り戻せないという思いは，時間からの退却を示している。

学業からの退却は，難しい課題にぶつかったとき，例えば，入学当初のドイツ語・フランス語，数学，学年が進んで専門科目，ゼミ，卒論，就職試験などが見掛けの引き金になると言われる。Yさんも卒論，就職の仮体験が引き金になったのだろうか。

この病理をとる者は，子供時代から厳しく育ち遊びを知らないので，人間として人に関わる成熟が不十分なのである。そこで対処方法は，まず母性的な関わりをしながら時には指示的な手段も必要である。そして父性を育てて行く。父性，男性性と言いかえても良いがはっきりキルという体験から人間性を成熟させるのである。その最適な方法は，試験を受けるということである。試験を受ける体験は非常にはっきりした結果を提示してくれる，受かったという喜びは大きな自信となるのである，アパシーのメカニズムの基本には，人間的な自信のなさがある。自己不確実状態に陥っているので自信ないことからは，逃げてしまう。試験を受けることは非常に大変な行為なのである。それを乗り越えることが大きな自信となることは想像に難くない。Yさんに対してもこの方法で対処して来たから卒業までこぎつけたとも言えるが，この自己不確実者ともいうアパシーとうつの区別が最も困難だと山田も述べている。うつであった場合は投薬することが，最良の治療法の1つと言えるので，病名をはっきり告げ一定期間の服薬を続けながら，アパシーの対応の仕方を取り入れるのがこのようなクライエントへの治療として有効だったのではなかろうか。

2)　2回の自殺未遂

半年の間に2回の未遂事件があった，それぞれの少し前は，調子が上がって来そうかなとちょっと油断してうっかりしたことを口走ってしまったことが，引き金になってしまった感がある。

第1回は，10月18日だが，16日の面接でTATカードを見せお話を作ってもらおうとするが，なかなか出て来ない，カード1は男の子がヴァイオリンを見ている。そこまでは誰が見てもみえる，との思い込みが，Tにあったようだ，後でよくよく眺めてみるとヴァイオリンらしく描いてあるが，上と下の線はつながっていない錯覚で結び付けていたに過ぎない，それぞれの広がりを見てしまったYさんについていけなかったTの思考の柔軟性のなさが，「やっぱり私はだめなのだ」とのサインを受け取らせてしまったのである。

第2回は12月1日だったが，その前の11月29日の面接は，堂々巡りに陥っていた。2人でどうしようどうしようと沈黙を多かった。これもYさんにTを困らせて悪かった私はだめな人間との思いを募らせたことだろう。このあたりは，1日置きに面接を続けているが，これだけ重

い状態の人をこのように頻繁に合うことは，T のエネルギーの蓄積が出来ずあまり好ましいこととといえなかった。入院状態での面接とは違うといえよう。

幸い2回とも大事には至らなかったが，これは，逆に T に警告を出した行為と受け取って良いのではなかろうか。

3) **図5**からみたうつの波

あらためてもう1度**図5**でそれぞれの波を見直してみよう。1回目の少し高まった状態は，T のところに来るようになって何とかなるかなという期待を寄せてくれた高まりと見られる。このまま行くかなと思っていると9月16日，約束日であったが母親と一緒に来るそして母親がいつもの通りどんどん話をしてゆく，時間になったら Y さんとは殆ど話しもせず終わりにしてしまった。この辺りから，T も私のことなんかわかってくれないとがっかりした。そしその後の10月16日の面接では決定づけることをいって未遂に追いやってしまったのであろう。そこからの立ち上がりは，奥多摩で出会った人々や，電話を掛け，逢うことになった友達の力である。それを少し持続できたのは T の態度も，この頃からかなり頻繁に Y さんを待ち，いつでも逢って良いとの姿勢を見せたことで，私は見捨てられたのではないと多少なりとも自信を取り戻したのではなかろうか。11月20日の面接では，自分の気持ちが素直に出せている。T に自分のいらいらをぶつけられるようになったのである。ところがこれをあまり短い間隔でやられると T の方が持たなくなるそして2回目の未遂事件になる。そこからの立ち上がりにはまた少し時間がかかった。友達の訪問がきっかけになったのである。

波が上向くときには，いつも誰かの関わりが必要だった。自分をわかってくれる人自分の存在を認めてくれる人と言っても良いだろう。淋しいのである。淋しさを癒すことが出来るのは誰かわかってくれる，関わりを持つ人間が現れることなのである。そんな人に巡り合えることが，自信を取り戻すことになる。

4) 心理テストの効用

面接の途中で心理テストを使うことがある。それは，クライエントの気持ちをより理解し易くすることも多いし，話の流れを良くすることもある。Y さんの場合も沈黙が多く，何を考えているかを知りたく何度かテストを試みてみた。10月16日⑥に用いた TAT は前項で指摘した通り自殺未遂の原因になったとさえ言えるかもしれない。これに対して，12月4日㉕で行った BAUM TEST ではその絵を見た瞬間，Y さんのつらさに声を出せないほどの痛みを感じた。実のなる木の筈が実はおろか葉もなく枝はそのとがった先を四方に広げているが，画用紙一枚を Y さんの生活の場とするなら非常にわずかな場しか存在していないことになる。こんな時の面談場面では，抱きしめてあげるだけと言った時間になっても良かったのではないかと思う。実際には，それは出来なかったが，つらさを少しでも受けとめる材料になった。それは，2月27日㊱気持ちの高揚した状態で木を描きたいからとクレヨンを要求し実の一杯着いた木を描いて行ったことからも㉕回の気持ちを持続させていただろうことが伺える。

3. おわりに

Y さんの症例は，鬱病者との半年の関わりを述べたものである。うつはアパシーとの区別が難しい，どちらも自信を失ってしまったものを回避する点が，一致するからである。自信を取り戻せる方法があるとすれば，いずれも有効な対応といえる。ここでも半年間の対応で，一応卒業

までこぎ付けることが出来たのは，アパシー者への対応を取ったからである。ただこの間心理テストの仕様に関しては，TAT では明らかに失敗であった。BAUM テストはクライエントの気持をつかまえるのに有効な手段となった。ただ悔やまれることは何と言っても，1年後の Y さんの自殺である。ここではただ冥福を祈り死を無駄にしたくない思いだけを記しておく。

参 考 文 献

1) 山田和男：アパシーの治療「増補青年期の精神療法」金剛出版 '91
2) 山田和男：スチューデント・アパシーの基本病理「現代人の心理と病理」サイエンス社 '87
3) 垣内順子：「TAT アナリシス」垣内出版 '84
4) C/コッホ/林訳：「バウムテスト――樹木画による人格診断法」日本文化科学社
5) 林・一谷編著：「バウムテストの臨床的研究」日本文化科学社